
赤い雨

結城陸空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い雨

【Nコード】

N5448A

【作者名】

結城陸空

【あらすじ】

周りを見渡す限り1つも島がない海の上に浮かぶたった1つの孤島この島は【天国に一番近い島】と呼ばれていた。そして、この島で育った少年と島の外から来た少女の出会いが運命という歯車を動かすこととなる

A c t 1：天国に一番近い島（前書き）

宇宙作、【赤い雨】。ご覧頂きありがとうございます。これから始まる物語、読者様が充分楽しめるように精一杯努力してまいりますのでよろしくお願いします

Act 1：天国に一番近い島

まるで海の色をそのまま写した鏡のような青い…青い空の下、海の息づかいも聞こえてきそうなくらい静かでしなやかな浜辺に、漆黒にも似た綺麗な黒髪の少年が立っていた。

少年は、浜辺から遥か遠くの島を見るように、その黒い瞳でひたすら真っ直ぐ海平線見つめていた。そう…少年の見つめる先には島が無かったのだ。

いや…彼の立つ場所から360度どこを見渡しても小さな島1つ見当たらなかった。彼がいる場所は、周りに一切、島がないまさに完璧とも言えるくらいの孤島だったのだ。

この島には約3000人の人間が暮らしている。島に住む人達は誰しもがこう言う。

「この島は天国に一番近い島だ」

と…。

みんながそう言うのには訳があった。

この島に住む人達は、一部の100人ほどの人間を除いてまったく働く必要が無かった。

働かなくても総合市場に行けば水も食料もそのほかの生きていく上で必要なもの全てが手にはいった。しかも全て無料で。

さらに、公共の施設、機関、娯楽に至るまで全てが無料で利用できた。まさに誰もが求める理想のような島のお陰でこの島のほとんどの人達は働かなくてもよかったのだ。天国に一番近い島と言われるのも当然だった。

しかし、そんな島にもいくつかの掟が存在した。その内の1つは【決して島の外に出てはならない】というもの、そして【決して島の外から来たものを受け入れてはならない】というもの。

しかし、少年は偶然にも見つけてしまった。静かな浜辺に横たわり倒れている、明らかにこの島の人の服装とは異なる姿をした少女の姿を…。

A c t 1：天国に一番近い島（後書き）

どうでしたでしょうか？まだほんの障り程度なのでよく分からないと思いますがこれから話を面白くしていきたいと思いますので次話
も是非ご覧下さい。

Act 2：会話

「ん……、こ、ここは？」

「あ、気が付いた？」

少女が意識を取り戻すとそこは浜辺ではなく薄明かりが射し込む涼しげな部屋のベッドの上だった。少女の目の前には黒髪の少年が椅子に座っていた。

少女は辺りを見回し部屋の中の様子をうかがった。部屋の中には、タンス、椅子、机、冷蔵庫など生活に必要な家具など一式が揃っていた。少女は再び視線を少年に向けて言った。

「あたし、どうなってたの？」

「浜辺で気を失って倒れてたんだ、だから助けたんだ」

少年は見た感じは20歳前後だが、その話し方はまだ幼さが残る小さな子供のようなだった。

「……そう、……ありがとう」

「……僕の名前はレン、君は？」

少年は無邪気な笑顔で少女に質問する。

「あたし？あたしの名前はリタよ」

「どうして浜辺で倒れてたの？」

「……どうしてと言われてもよく覚えていないんだけど、たしかあたしが乗っていた船が沈没して海に投げ出されたの……それで気を失って気が付いたらここに……」

少年の無邪気な笑顔がさらに無邪気になり再び質問する。

「……じゃあ島の外の人なんだ」

「ほんとだね、この島に島の外の人を入れちゃあ駄目なんだ、……でもまあこの場合なら仕方ないかな……」

少年は椅子から身を乗り出して答えていた。まるで生まれてはじめて見るものを見るように目は輝いている。少女はその目に戸惑いながらも答えた。

「そうなの？迷惑にならない？」

「多分大丈夫、それに困ってる人がいたら助けなさいって小さい頃から親に言われてたしね」

それを言い終わると再び少年は椅子に腰を下ろした。

「いまは：１人なの？両親とか兄弟は？」

「両親は１０年前に天国に行った、兄弟はたくさんいるけどみんな別々に住んでいて、いまはこの部屋に僕１人で住んでる」

「そう、変なこと聞いてごめんなさいね」

「いいよ、それでもみんな幸せなんだから」

「えっ？そうなの？」

少女は不思議そうにたずねた。

「うん、だってこの島は天国に一番近い島なんだよ、世界一裕福な島なんだ」

「天国に一番近い島？」

少女はさらに不思議そうにたずねた。

「うん、この島はね、何をするのも無料で出来るし、欲しいものもなんでも無料で貰えるんだ、だから生活に絶対困らないんだよね」
少女はこの時思っていた。昔、そういう話を聞いたことがあることを……。天国に一番近い島、全てが手にはいる島。少女は暫く黙り込んだ後、少年に向かって言った。

「やっぱり、あなたに迷惑になるからここから出ていくわ」

「え？大丈夫だよ？」

少年は少しビククリした顔で言った。

「ううん、それに少し調べたいことがあるし、助けてくれてありがとね」

少女はそう言うとベッドから降り、椅子に座っている少年の横を通りすぎて、正面にあるドアから静かに出ていった。

Act 3：街

少女・リタが少年の部屋から外に出ると、街の賑わいが聞こえてきた。街は非常に活気付いている。リタはそんな賑わいに耳を傾けながら街の様子を伺い始めた。

街にはたくさんの平屋が規則正しく並んでいた。造形美とも言えるくらい綺麗に並んだ建物の一軒、一軒に人が住んでいるようだ。建物にそうように綺麗に道路も整備されている。道路には白線で数字がふつてあった。リタの立つ道路には『5』と書かれていた。リタはその道路の先を眺めた。道路は街の中心に向かってまっすぐに延びている。街の中心には高層ビルが立ち並び、中心部には他のビルが比べものにならないくらいの高い…まるで頂上なんてないのではないかと思うほどの高いビルが建っていた。突然リタの耳に入ってくるざわめきが大きくなった。リタはその声にひかれてざわめきのほうを見た。するとそこには兵士のような格好をした人間が10人ほどと、眼鏡をかけ白衣を着た長身の男が立っていた。男が1人、平屋の中に入っていく。リタはその様子を余すことなく見ていた。それと同時にリタの足は少しずつ前に進んでいた。平屋の前にはいつのまにか人だかりができ、リタもそこに歩みよっていた。

数分も経たないうちに男が平屋から出てきた。後ろには平屋の住人だろうか、男と女が満面の笑みを浮かべて出てきた。まるで、人生最高のよい出来事でも起こったかのような笑いかただ。

その男と女は長身の男と兵士の後を嬉しそうに中心部のビルに向かって歩いて行った。

すると人だかりの中にいた1人の女性が言った。

「彼等はずいに天国かあ、いいなあ」

それを聞いていたリタは不思議に思い、その女性に訪ねた。

「あの…彼等は天国に行くんですか？」

「ん？…ええ、そうよ。彼等は今年30歳になったらいいわ。だから天国に行けるのよ。私達も早く天国に行けるといいわね」

リタは少し戸惑いながら相づちをうち、また聞いた。

「30歳になったら天国にいけるんでしたっけ？」

「え？あなた大丈夫？そんな常識じゃない。まあ例外で30歳になる前に天国にいける人もいるんだけどね」

「ああ…そうですね」

リタはとりあえず話を合わせたが、この女性の言っていることが変だと気が付き始めていた。リタは再び聞いた。

「さっきの長身の男の人は誰でしたっけ？」

「……………あなた、ほんとに大丈夫？あの人はケンキュウシャよ。あの人が天国に連れて行ってくれるのよ」

「ケンキュウシャ…？……………研究者？」

リタはまた昔聞いた話を思い出していた。昔確かに聞いた天国に一番近い島の話。全てが手に入る島…。

でも……………全てを。

リタは中心部のビルに目をやると、そのビルに向かって歩き始めた。その時、先程のレンと言う少年の平屋にも兵士がやってきていた。

A c t 4：疑問

リタは街の中心にそびえ立つビル郡に向かって歩いていった。自分の中に芽生えた疑問の答えを見つけるために・・・。

リタのいた場所から、中心のビルまで歩いて20分ほどで着いた。そのビルから周りを見てみると、それぞれ番号のふられた道路がすべて中心のビルに向かって一直線に伸びているのが分かる。

リタは、中心のビルを見つめ、ビルの周りの気配を静かにうかがい始めた。

進入できる場所を探すためだ。

ビルにはそれぞれ街から伸びる道路の先に一つずつ入り口があった。人はいないようだ。どこからでも進入できそうだが・・・、

リタの目はすでにあるものを捕らえていた。それはカメラだった。各入り口には一ずつ監視カメラが設置されていた。これでは進入してきたとしてもすぐにばれてしまう。リタはなにか方法はないかと周りを伺う。

とそこに、街から兵士達と白衣の男がやってきた。白衣の男は先ほどの眼鏡をかけた長身の男だ。兵士の後ろには黒髪の少年がいた。レンだった。

「レン？」

リタは思わず声が出てしまった。その声に白衣の男、兵士、レンも気がついた。

「リタ？なんでここに？」レンはものすごく笑顔で言ったが、リタは答えれなかった。しかしレンはリタの答えを待たずに言った。

「リタ、僕、天国に行けるんだ！まだ18歳なのにだよ！？やった

ね!!」

レンはあふれんばかりの笑顔で言った。リタはどう答えていいのかわからなかった。薄々感づき始めていたからだ……。

「ほら、天国にいくぞ!」

兵士の一人が言々とレンは兵士とともにビルの中へ入ろうとした。

「レン! 待って!!」

リタが大声で呼び止めた。

その声に兵士とレンの足は止まり、レンは再びリタのほうを向いた。

「リタ、どうしたの?」

「レン、私、昔聞いたことがあるの……。天国に一番近い島……。すべてが手に入る島……。でもその島は……」

レンは不思議そうに話を聞いていた。

リタは続けた。

「その島は、すべてを失う島だと……」

「すべてを……。失う?」

レンは問いかけた。

「そう……。レンよく考えて、天国って何? そのビルに何があるの? 天国に行けばなにがあるの? 天国に行ってどうするの?」

レンは驚いた表情でリタを見つめる。

そのとき白衣の男が言った

「早くその少年を連れて行け!」

その声に反応して兵士が無理やりレンを中へ入れる。

「待って! リタと話をさせて!!」

レンの叫びもむなしくレンはビルの中へと引きずり込まれて行った。

「レン!!」

リタはレンの名前を呼んだ後、白衣の男を見つめた。

「レンをどうするつもり?」

「天国ってなんなの?」

白衣の男はリタの顔を無表情で無口で見つめていた。

「答えなさい! この島はなんなの!?!」

「…………おまえ、この島の人間ではないな」

白衣の男の口がようやく動いた。それと同時に白衣の男の腕も一緒に動いた。

腕の先、手には銃が握られていた。

そしてその銃口はまっすぐリタの頭に向けられていた。

Act 5：真実

銃口はリタの頭をまっすぐ狙っていた。周りには人はいない。辺りに張り詰めた空気が張り巡らされた。銃を持った白衣の男と無防備の少女、この二人が辺りの空間を支配していた。しばらく沈黙が続いた。しかし沈黙はすぐに破られた。

「銃？あなた達はいつたい？」

沈黙を破ったのはリタだった。

「それはこちらの台詞だ。いつたいどうやってこの島に入った？」

「・・・別に入ったわけじゃないわ。偶然流れ着いただけ、突然船が沈没したの」

「船？そうか・・・、あの船の乗組員か・・・。おそらく船長が航路を間違えたのだろうな。運が悪いな」

白衣の男は不敵な笑みを浮かべている。

「どうということ？」

リタは聞いた。

「あの船を沈没させたのは我々だ。最もこちらは島の掟に従っただけだが」

リタは驚きの表情を隠すことなく浮かべた。

「この島には外のものを何人たりとも進入させるわけにはいかないのな。」

あの船は攻撃射程距離にいたので沈没させたまでだよ」

「なんて奴なの」

リタの顔は驚きから怒りに変わっていった。

「この島には掟がある。島の外から来たものは受け入れてはならない」という掟がな、そしてそれを発見した私にはお前を処分する義務がある」

白衣の男は笑みを浮かべながら言った。

「私を殺す気？ いったいこの島はなんなの？」

「・・・まあいいだろ。冥土の土産に教えてやろう」

白衣の男は語り始めた。

「この島の人間は働かなくてもいいのだよ。働かなくてもほしいものはすべて手に入る。食べたいものを食べることができ着たいものを着れる。だから苦勞することや、悩むこともない・・・」

「島の人間は、二十歳になると必ず結婚する。相手は我々があらかじめ決めている。その後、女は一年に一度子供を生み、10年で10人の子供を生む。生むのはすべてこのビル内部でだ。そのときこちらで不妊が起これるように遺伝子进行操作をする。」

「30歳になると強制的に天国に行ける権利が得られる。だが中には先ほどの少年のように18歳で天国にいけるものも存在する。」

「天国ってなんなの？」

話の隙を突いて、リタが聞いた。

「天国とはそのままの意味だよ。この島は天国に一番近い島だと言っただろ？」

「この島はすべてが手に入る島だ。この島の人間はほしいものはすべて手に入れることができる・・・。ただし」

「自分の命以外は・・・だが」

リタの顔は一瞬引きつった

「自分の命？」

「そう、この島の人間は自分の命など持てはしない。すべて我々研究者のモルモットに過ぎない」

「モルモット？ どういうこと？」

「彼も含め、この島の人間はすべて人体実験の道具ということだよ」

リタは驚きのあまり息を詰まらせた。

「人体実験？」

「そうだ、それが天国に一番近い島の正体だよ」

「この島の人間は、自分がモルモットだということは知らない。すべて幼い頃からの教育で天国に行けば更なる幸せが待っていると教えている。いや洗脳していると言ったほうが正しいかな？」

「天国に行くとは実験体になるということ、つまり30歳になれば強制的に実験体になってもらう。必要とあれば30歳にならなくとも実験体となってもらう」

「つまりさっきの少年は18歳で実験体だ」

「実験体の個体数を減らさないように女には子供を産ませ、ストレスを与えないようにほいもはすべて提供する。そして天国にいくことを最大の喜びとして洗脳してビルに簡単に連れ込むことができる」

「島の人間はすべてそうやって生きてきたのだ。お前が生まれる何年も前から、いまさらお前が口をだせることではない」

「実験された人達はどうなるの？」

リタは真剣な顔で聞いた。

「・・・人は死ななければ天国へはいけない。最高でも30歳で天国に行く。この島は天国に一番近い島だ」

「・・・彼は・・・レンにはなんの実験を？」

リタは冷静に聞いた

「彼は、一つの大きな実験の最終実験に使う」

「おそらく成功するだろう、成功すれば戦争で勝てるものはいなくなる」

「・・・彼の体内に核爆弾を埋め込む・・・そして神経回路と脳をつなぎ、

意思一つで核を爆発させることができる体になる」

「素晴らしいことだぞ、一人一人が核と同等の破壊力をもつ兵器となる、そうなれば」

「そんなことはどうでもいい!!」

突然リタの馬鹿でかい声が響き渡った。

「彼と島の人達を解き放つて!! 彼らは人間なのよ?」

「それは違うな、彼らは我々のモルモットに過ぎない」

「そして、お前は侵入者の一人に過ぎない」

「レンは、私の言ったことに反応して疑問を持ってたわ」

「関係ない。そろそろ実験は終了するはずだ。過去何人もの人体実験のおかげでこの実験は短い時間でできるようになったからな」

「実験が終われば彼は廃棄される、そしてここでお前を殺せばすべてが丸く収まる」

「あなた達は人の命をなんだと思ってるの!!?」

「人ではないと言っているだろう。分からない奴だ」

「まあいいお前との話もそろそろ終わりだ。私も結構忙しいのでな。天国あの少年に真実でも語ってやればいいさ」

白衣の男に握られている銃の引き金がゆっくり引かれた。

銃口から発射された弾は、リタの額の中心を突き抜け後頭部から抜けて後ろの壁に当たった。リタは頭から大量の血を流しながら地面に倒れ人形のように動かなくなった。

「フン・・・」

白衣の男は不気味に笑い、銃を下ろした。

Act 6：暴走

リタを撃ち殺した白衣の男は銃を下ろすとリタの死体に背をむけた。

するとビルの中から数人の兵士が出てきた。なにやら混乱しているようだ。

「どうした？少年の実験は成功したのか？」

白衣の男は兵士に聞いた。

「ハ、ハイ！実験は成功しました！しかし、突然少年の体から熱が発生しましたんです！」

「なんだと！？熱？」

すると突然ビルの雲より上の部分から爆発音が聞こえた。その爆発は地面も揺るがすほどだった。それとともに警報が激しく鳴り響いた。

『暴走だ！全員緊急退避せよ！暴走だ！全員緊急退避せよ！』

「暴走？」

ビルの中から兵士達と白衣を着た研究者達がいそいで出てきた。眼鏡をかけた長身の白衣の男は近くを通った白衣の男の腕をつかみ聞いた。

「なにが起きたんだ？」

「暴走だ、今日実験する予定だった。レンという少年に核を移植する実験。実験は成功したんだが実験が終わった瞬間、少年の体から高熱が発生したんだ。さっきの爆発は近くにあった機械が熱にやられたんだろう」

「核融合が起こってるのではないのか？」

「意思一つで爆発させることができるんだ。ないとは言切れないが・・・、とにかくいまは逃げることだ。もし核爆発が起こればこんな島など跡形もなく吹き飛んでしまうぞ！！」

そついうと白衣の男は眼鏡をかけた白衣の男の手を振り払い逃げて

いった。そして眼鏡をかけた白衣の男は一人ビルの中へと入っていた。

ビルの中にはエレベーターがいくつもあったが白衣の男は横にある階段を使った。とっさにエレベーターが止まったときに困ると判断したのだろう。

白衣の男は階段を必死に上がった。しかし高すぎるビルにすぐに体力は奪われ、休憩しながら少しずつ登っていると、あっという間に夜となっていた。

そして白衣の男が辿り着いたのは空の見えるビルの屋上だった。空は暗く雨が降り出してきていた。白衣の男は息を切らしながら、前を見た。

そこには、レンと思わしき人間が雨の中、ひとり空を見つめて立っていた。

Act 7：赤い雨

白衣の男息を切らしながらは雨に濡れながら立っている少年に向かって手に持っていた銃を向けた。

暗い空を見つめていた少年は、こんどは視線を自分の前に向けた。

「この島はこんなきれいに街が並んでいたんだね」

「……すべて分かったよ、この島のこと、監視カメラのモニターが実験室の横においてあって、全部聞こえた」

白衣の男は雨に濡れている眼鏡を拭くのも忘れ、まだ息を切らしながら必死に少年のほうを見ている。

「リタは……死んだんだね」

そういうと少年は、白衣の男のほうを見た。

少年は確かにレンだった。しかしレンの髪の毛は黒ではなく銀色になっていた。目は緑色の瞳を持ち、弱弱しく目を開けていた。少年の体のお腹の部分は赤く膨れている。

「はあ……はあ……お前も死ねばすべて丸く収まる。はあ……

すべてうまくいく」

「……うん、死ぬよ」

「はあ……、はあ……」

「でも死ぬのはみんな一緒だよ、この島の兵士も研究者も実験体も……」

「違う！！死ぬのはお前だけだ！お前を殺す！そうすればすべてが元に戻る！」

レンは薄く笑みを浮かべ言った。

「もう……終わりだよ、すべてを終わらせるんだ」

「こんな島はあっちゃいけない……」

「違う！！この島こそ世界に必要な島なのだ！どこの国も人体実験は人権に反するだとかそんなことを言っている！だから何も進歩しないんだ！どこの国に遺伝子操作で不妊を無くすことができる？

どこの国に人間の体の核を埋め込むことができる？すべて我々の島の成果だ！この島なくしては人類の進歩はありえない！！」

「僕は・・・、この島は幸せな島だと思っていた。ほしいものは何でも手に入り、なんの苦しみも不幸もない」

「でもほんとは・・・この島の人ほど不幸な人間はいない」

「おまえ達はモルモットだ！そんな感情など必要ない！すべて我々に任せていれば全員が幸せのうちに死んでいける！全員が天国にいける！！」

「あんた達も？」

「・・・あんた達が言っていたことで一つだけ正しいことがある・・・」

「天国にいけばさらなる幸せが待っているということ、確かに天国にいけばもうこんな実験をされることもない・・・」

白衣の男は、レンに向けた引き金を引こうとした。そのときレンが言った。

「ごめんね・・・みんな、でもすべて終わらせる」

それをレンが言い終わると同時に銃口から激しい音と共に弾が飛び出しレンの頭めがけて飛んでいった。しかしそれはすべてが終わる瞬間だった。

空から針が降ってきたかのように痛いくらいに激しく降り注ぐ雨の中、

人で賑わっていた昨日の夜とはまるで違う静けさのかもしれない街の中心にたつビルの屋上に銀色の髪を持つ青年が立っていた。

青年の目にかかりそうなくらい長い前髪の隙間からうつすら見える緑色の瞳は力がなく、いまにも死にそうなくらい弱弱しく、その顔には

薄っすら悪魔のような笑みが浮かべられていた。

一瞬

星が赤い閃光に包まれたかと思うと、
次の瞬間には雨は、
赤く染まっていた・・・。

～ F i n ～

A c t 7：赤い雨（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございます。残酷な話ですが、いかがだったでしょうか？

実はこの話を書いている最中にとんでもないものを見ました。それは映画アイランド。見たことある人はこの赤い雨を読んで「おや？」と思ったかもしれません。確かに類似点は多いですが完全に偶然です。頭の中で話はまとまっていたのでパクリではないです。アイランドの監督と僕は発想が同じなのかもしれません。僕はアイランドを見て連載をやめるべきか本気で悩みました。それだけ似ていることに驚いたんです。

とまあトラブルもありましたが、無事終了しましたので、感想、評価など頂けると幸いです。それでは次回作もよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5448a/>

赤い雨

2010年11月14日02時51分発行